

クレアと Childhood

鈴木 蓮 一

(1)

子供時代の回想をテーマとするか、あるいはその回想を含む詩はクレアの場合膨大な数量となる。1830年代以前の詩においては「非常に圧倒的な現在の世界」(“a world of such overwhelming presentness”)を創出して、《時間の流れ》に対する意識は希薄であった。だがその時期以後それまで顕著であった空間的関心が減少するにつれ、時間的関心が高まっていき、「より内化された型の意識」(“a more internalised mode of awareness”)が現われ、外界物への自己投影とその再構築をし始めている。¹⁾ ‘Helpstone’ と題された詩の中で「すべて楽しい子供時代に知ったこれらの喜び / 私が今までに知ったすべてのことはおまえのところ (ヘルプストーン) で過ごされたのだ²⁾」というように、子供時代におけるヘルプストーンでの自然についての体験及びその回想は何にもまして彼の詩の本質を成すものであるから、クレアにとっても子供時代は計り知れない程重要な意味をもっていると考えられる。³⁾ 1820-30年代の詩は、Chilcott によれば、「自己を時間の中に置き⁴⁾」、自己のアイデンティティを追求していった軌跡である。本稿では大人になったクレアが子供時代について、また子供から大人への変化について何ういう意識と感情を抱いていたかを ‘Childish Recollections’(1819-20), ‘Childhood’(1832), ‘The Progress of Ryme’(1821-24), *The Shepherd’s Calendar* (1827), ‘The Eternity of Nature’(1832)等を中心にさぐってみたいと思う。

(2)

初期の詩の中で ‘Childish Recollections’は子供時代についての詩人の情意が簡潔に比較的よくまとめられているので、まづこの詩から見てみよう。

Each scene of youth to mes a pleasing toy
Which memory like a lover doats upon
& mixt wi them I am again a boy
& tears & sighs regret the things thats gone

An wi enthusiast excesses wild
The scenes of childhood meet my moistning eye
& wi the very weakness of a child

I feel the raptures of delights gone bye

(1, 2連)

第1連では、「私」にとって回想される子供時代の情景は「楽しいおもちゃ」のようなものであり、「記憶」は恋人の如くそれを溺愛するといひ、そして「私」はその「おもちゃ」と遊ぶ時、再び子供のようになるという。再び子供のようになるとは、子供時代の情景を回想する喜びに他愛なく一心にひたっている状態のことを指している。そして「今ではもう存在しない自然の事物」⁵⁾を惜しんでいる。子供時代には存在し、今は存在しない自然の事物は、『困い込み』がもたらした地形上の変化によって失われた事物をも指示しているのである。第2連では、このように回想された情景が懐かしさで涙に濡れた眼に浮かぶのであるが、その情景への子供じみた愛好心をまだ抱きながら、「忘我の喜び」が消え去ってしまったと感じている。「忘我の喜び」を再び感じるができないということは、「思い出すというよりもふたたび感じる」ことを意味する「感情的記憶」即ち過去が「当時の一連の感動をそのままともなって、現在の瞬間のなかに浮かびあがる」⁶⁾ということと全く異なる。子供時代の本質は一言でいえばこの《喜び》である。喪失したこの《喜び》の回復がクレアの詩の最大のモチーフといっても過言ではないであろう。子供のように他愛もなく子供時代の情景を回想する時、たとえその情景のイメージが平凡でつまらないものであっても、それを詩に書き留めざるをえないのである。Tilcott は「現在は存在を確認することができないというロマン派共通の不安が彼（クレア）の作品において特に著しい切迫感を帯びてくる」といひ、さらに「彼（クレア）はワーズワスよりも持続した状態で、失われた時を求める詩人である」と評している。⁷⁾そして「現世のいばら道」における子供時代の幸福な日々についてのすべてを「素朴に称賛して」回想する詩を弁護してクレアは次のようにいう。

Hard is that heart affecting to despise
The verse that sings in childhoods simple praise
Bound to our memory with the tenderest ties
The all we found in this lifes thorny ways
Of real happiness & golden days

('The joys of childhood are ...' 6連 1820-22)

さて、子供の頃仲間達としばしば遊んだある懐かしい場所へぶらぶら歩いて行った詩人はこういう。

An old familiar spot I witness here
Wi young companions were* we oft have met
Tho since we playd tis bleachd wi many a year
The sports as warmly thrills my bosom yet

*where (5連)

昔仲間達と遊んだ時以来、ずいぶん年月が経ったのでその場所は「晒されて白くなってしまった」ように見えたのである。このことは、子供時代に見たこの場所の印象を詩人が現在も鮮やかな形

でもっていながら、今現実に見る同じ場所を子供時代と同じように見ることができなくなっただけを意味するのである。だから「晒されて白くなってしまった」という表現は詩人の内面的変化を表わしたものであるといえる。こうした心の変化にもかかわらず、子供時代の「楽しみ」は、思い描くだけでも詩人をひどく興奮させるのである。この場所にある自然の事物と自己の心の変化についてさらにこう語る。

& every thing shines round me just as then
Mole hills & trees & bushes speckling wild
That freshens all those pastimes up agen
O griveous day that changd me from a child

(7連)

「あらゆるものがちょうど子供の時のように私のまわりで輝いている」という一行は、自然の事物は何も変化していないのに《時間》が詩人の子供から大人へ変化させてしまったことにたいする深い認識と驚きを暗示している。モグラ塚や木々、また斑紋のように無秩序に点在する茂みは、子供の頃のすべての「慰み」のイメージを鮮やかに眼前に魅らせるがゆえに、それらは詩人をして子供時代と現在の大人時代の差異をいよいよ痛感させ、《時間の流れ》を嘆かしめる。そして8連では少年時代がいかに幸福であったか、また「慰み」を追求していた時どれほどの「喜び」が自分のものであったかを語っているが、これは《過去》と《現在》についての内省の結果に他ならない。

To seek the play thing & the pleasing toy
The painted pootey shell & summer flowers
How blest was I when I was here a boy
What joys were mine in these delightfull hours

(8連)

自然は不変であり、人間は《時間の流れ》によって変化するのだという認識は、詩的経験という点で重要な内容を意味する次の詩行を生み出している。

On this same bank I bound my poseys up
& culld the sweetest blossoms one by one
The cowslips still entices me to stoop
But all the feelings they inspird are gone

(9連)

少年の頃と同じ場所である土手で同じようにキバナクリンソウを摘む詩人は、かつてその花が自分の心に吹き込んでくれた「興奮」は今では無くなっていることを実感する。その花を見てもそれはそれが喚起する感動を覚えることはもはやなくなっている。してみると7連の1行目「あらゆるものがちょうど子供の時のように私のまわりで輝いている」における輝きは、回想された自然の

イメージにおける天上界の輝きとは同じものではない。大人への成長に伴う「感動」・「忘我の喜び」・天上界の輝きの喪失感はさらにこう嘆かれる。

Tho in the midst of each endeard delight
Where still the cowslaps to the breezes bow
Tho all my childish scenes are in my sight
Sad manhood marks me an intruder now

(10連)

「自分が悲しい大人であることで今では私が侵入者であることがわかる」といっているが、これは何ういうことなのであろうか。まづ詩人は大人であることは悲しいことであると規定している。それは、子供時代には詩人をそれ自身の「喜び」でもって喜ばせてくれた自然の事物が今なお存在していて、詩人がそのただ中に在ってもその「喜び」を感受することがもはや不可能となっているゆえに「悲しい」ということなのである。

クレアが子供時代の「栄光」(“glory”)と「夢想」(“dream”)をいつまでも保持しようとし、それを阻害する大人時代を「悲しい」と感じていることは、ワーズワスが子供時代における自然との交わりから生じる「喜び」やその神秘に対する「驚き」を「意識の、詩的以前の状態」(“a pre-poetic state of consciousness”)とか「粗野な喜び」(“coarser pleasures”)と見做し、子供時代を「思慮のない」(“thoughtless”)未熟なものとして捉えていることと対照的である。⁸⁾ またクレアが子供時代を重視し、詩において繰り返し強調していることは、コールリッジの教育論についてのP. カヴニーの次のような説明文を想起させる。

コールリッジが主張した教育の主目的は、子どもが完全な姿を留めることであつたが、それは本質的には、人間精神に内在する特質を引き出す作用でなければならない。この特質は、子どもの驚異の念、喜び、想像力、本来の完全な姿を保持することによって引き出せるもので、その結果、子どもの頃の「もろもろの感情」が移入されて「おとなの力」になるのであろう。⁹⁾

子供時代にしばしば跳び越えた、曲りくねった水路、「われわれの木馬」と呼ばれた水門、花を摘んだり、「彩られたカタツムリの殻」を探した土手、石や土また水草で堰止めて遊んだ小川、よくよじ登っては見晴した木、こういった事物を見ていると当時の記憶が激しく甦り、回想の鮮明なイメージが詩人の脳裡を駆けめぐる。だがその記憶は所詮それ以上の何物でもなく、その作用が激しければ激しいほどそれだけそれは現在の詩人の境遇の悲惨さと精神の絶望的状態の深刻さを反映していることになる。

Fond memory warms as here with gravel shells
I pild my fancied cots & walled rings
& scoopt wi wooden knife my little wells
& filld em up wi water from the springs

Ah memory sighs now hope my heart beguiles
 To build as yet snug cots to cheer despair
 While fate at distance mocks wi gri[n]ning smiles
 & calls my structures castles in the air

(14, 15連)

詩人が絶望的状态から立ち直るために、小ぎれいな田舎家を建てようという希望を何んとか自分の心を欺いて抱くのであるが、《運命》がその田舎家を「空中楼阁」だと呼んであざ笑う。結局子供時代に小石を積んで田舎家を作って遊んだ時の記憶が甦える詩人は、現在自分の置かれている状況を省みてそれを嘆く。ところでマルセル・ブルーストはこういう。

既成事実の記憶はわれわれに、——「おまえはこのようであった」というだけで、われわれにふたたびそのようになることを許してくれない。この記憶は失われた楽園を回想のなかに返してくれないで、失われた楽園の現実をわれわれに立証する¹⁰⁾

クレアの場合も「溺愛する記憶がもつ快い苦痛は / 彼女の胸の内におまえ (ヘルプストーン) のあらゆる情景を持ち続ける」(“ . . . fond memory's pleasing pains / Within her breast your every scene retains ” ‘Helpstone’ 11. 147-8)というように、「記憶」は惨めな現実を忘れさせるという点では快であるが、それと同時にそういう現実を強く意識させもするという点では苦であるから、それに対してはアンビパレンスをクレアは感じていたといえる。「記憶」が自然の事物や詩人の精神ともつ関係は次のようである。

Now een the thistles quaking in the wind
 The very rushes nodding oer the green
 Hold each expressive language to my mind
 That like old mayteys tell of what has been

(16 連)

1820年では自然の事物が子供時代のように詩人に「忘我の喜び」を喚起することはなかったけれど、「旧友達の如く」かつての有様を事細かに物語ってくれる。「記憶」が衰退しているのではないかという疑念を彼はまだ抱いてはいないことがわかる。彼が「この世の喜び」を選び好みできるなら、それは再び少年に戻ることを求めるだけであるという。¹¹⁾ また「喜び」(“joy”)の回復についても「荒涼たる11月という時が過ぎ去った喜びを取り返してくれたらなあ」(“Would bleak novembers hour Restore the joys thats past” ‘Written in November’ 1819)とか「子供時代が自分のものだ」と主張する喜び / そうい喜びが大人時代と同質であったらなあ(“Those joys which childhood claims its own / Would they were kin to men”)というような願望を吐露する。この願望を持ち続ける限り、詩人は「記憶」を頼りにして回想によって過去に生きていくことになる。「記憶」のもつ力にたいする信念が最終連で述べられ、この詩を締め括るに適しいもの

となっている。

Life owns no joy so pleasant as the past
That banishd pleasure rapt in memory's womb
It leaves a flavour sweet to every taste
Like the sweet substance of the honey comb

「記憶という子宮」とは「記憶」が行う作用のことを「子宮」と呼んでいるのである。この「子宮」は現在は感じられなくなった過去の「喜び」を胎児のように包み込んでいる。詩人の「記憶」が自然の事物によって触発されるとき、「子宮」に内蔵されている胎児即ち過去の喜びのイメージが次々に生まれ出てくる。従って「記憶」は詩人にとっては詩的ヴィジョンの源泉であるといえよう。1820-22年に書かれた“The joys of childhood . . .”で始まる詩においては、「過去の甘美な想像が現われないなら / 記憶は退屈なものであるし精神は虚ろである」(“Dull is that memory vacant is that mind / Where no sweet visions of the past appears” 5連) という詩句が見られるが、これも過去を回復するうえでの「記憶」のもつ作用の重要性を強調したものである。

さて ‘Childish Recollections’ という詩をこのように読んでくると、子供時代から大人時代に変化したことの意味、子供時代が何んであったのか、大人になって何を失ったのか等の疑問についての、少なくとも1819-20年における、内省の結果が割合よくまとまった形で表出されているように思われる。だが大人になるとともに失った「忘我の喜び」とは何か、自然の事物が喚起した感動とは何か、それら事物の一つ一つが「大切な喜び」(“endear'd delight” 10連)であったのは何故か。感動とか喜びとかを自分から奪い去った大人というものをクレアがどのように理解していたのかといった疑問が次に残る。この疑問を明らかにするために私は、1832年に出版予定になっていた詩集 *The Midsummer Cushion* に収められている ‘Childhood’ という詩を読んできたいと思う。それはこの詩の創作までには ‘Childish Recollections’ が書かれてから最長13年という歳月が経っている可能性はあるが、それ程ではないにしても相当長い期間が経っていることが想定され、この間クレアは子供時代と大人時代についての内省を深めていったものと推量されるからである。

(3)

‘Childhood’ という詩においてクレアは、子供時代の特徴を「楽しい夢」(“the happy dream”)・「楽しい遊び」(“joyous play”)・「嘆きのない生活」(“the life without a sigh”)・「思い描くことができないほどの美」(“the beauty thoughts can neer pourtray”) だと述懐しているが、これらを享受できたのは彼が想像の世界に生きていたからである。子供時代の幸福な日々は想像力の働きを通してのみ可能であったといっても過言ではない。想像力の衰退とこれらの特徴の喪失を次のようにいう。

& fancy at its sweetest hour
What eer may come to pass

Shall find that majic thrill no more
Time broke it like his glass

(3連)

「想像力」は何が生起しようとして子供時代の「あの心を奪うわくわくする感じ」を覚えることはなくなるであろう。《時間》が「わくわくする感じ」を砂時計のようにこわしてしまっただからだという。“thrill”は子供時代に喚起され、体験されたすべての「感情」を象徴することばである。大人になるにつれ、次第にこの「感情」あるいは「感動」を失っていく事実を‘Sonnet’(1819-20)でこう述べる。

Childhood meets joys so easy every where
Charmd & delighted wi but every scene
Ah was I still a child the names so dear
How odd a change of feelings intervene
Still former things that pleasd me interfere
& I may view them but its usless now
No joys abound for me . . .

また、‘Song’(1819-20)では、「私は死んで冷たくなった感情が / ふたたび温まり 目覚め そして感じることを願う」(“I only wish for feelings dead / To warm & wake & feel again”)とあって、「感情」の回復(感受性の回復ともいえる)への願望を表わしている。こうしてみると、クレアにとって、この「感情」がいかに重要であったかがわかる。このようにクレアは《時間》というものの影響力を、人間が抵抗できないその破壊力を認識している。《時間》は子供を大人にし、子供の「想像力」は大人の「理性」にとって代わられる。自然の事物は「半ば忘れられた喜び」(“half forgotten joys”)が湧出する泉を詩人の心の中に作る。そういう自然の事物の「カタログ」を「理性」は軽蔑する。現在の自分が子供時代の自分と変わってしまったことを次のようにいう。

I seek no more the finches nest
Nor stoop for daisy flowers
I grow a stranger to myself
In these delightful hours
Yet when I hear the voice of spring
I can but call to mind
The pleasures which they used to bring
The joys I used to find

(42連)

子供時代の遊びをしなくなった詩人は、春の楽しい一時にも自分が以前の自分とは違う存在になっ

たことを嘆く。“I grow a stranger to myself”における“grow”は《時間の流れ》を鋭く意識したことばではないだろうか。¹²⁾《時間の流れ》がもたらす自己の変化については初期の詩‘To the Cowslip’(1821-4)において既に次のような表現が見られる。

But I'm no more akin to thee,
 A partner of the spring;
 For time has had a hand with me,
 And left an alter'd thing:
 A thing that's lost thy golden hours,
 And all I witness'd then,
 Mix'd in a desert, far from flowers,
 Among the ways of men.

(2連)

《時間》が自分に手を加え、子供時代とは違った者に、「黄金時代」を喪失した者に変えてしまった。それで今は自分はもはや自然と「近い」ものではないという。それは季節がめぐり、春ともなればかならずキバナクリンソウが咲く、即ち自然は永遠に循環するが、それとは異なって、自分は「黄金時代」へ回帰することなく、大人へと衰退していくばかりだという意味である。¹³⁾

《時間の流れ》による自己の変化を意識したクレアは自然の事物の不変を強調する。

The daisy looks up in my face
 As long ago it smiled
 It knows no change but keeps its place
 & takes me for a child

(41連)

The firetail on the orchard wall
 Keeps at its startled cry
 Of “tweet tut tut” nor sees the morn
 Of boyhoods mischief bye
 It knows no change of changing time
 By sickness never stung
 It feeds on hopes eternal prime
 Around its brooded young

(43連)

ヒナギクもジョウビタキも個体としては変わっても種としては連綿と継起しており、変化を知らないものであるように思われる。それら自然の事物・生命は、鳥にいたづらをした少年であった「私」が「大人」に変化していることと対照的である。このように自然は永遠に回帰するものとして提示される。そしてそれがクレアの「永遠」についての概念を表わしていることは J. M. Todd

が指摘するとおりである。¹⁴⁾

自然の生命は時間の世界即ち変化の世界にありながら、変化を知らない。だからヒナギクは「私」を今でも子供だと思い、ジョウビタキは少年にいたずらをされた朝が過ぎ去ったことがわかっていないように思われる。引用中の“keeps”は自然の永遠性を象徴することばであると考えられる。自然の永遠性、子供時代の「喜び」、自己の変化、「記憶」の相互関係について詩人は更に次のように考えている。

& spring returns the blooming year
 Just as it used to be
 & joys in youthful smiles appear
 To mock the change in me
 Each sight leaves memory ill at ease
 & stirs an aching bosom
 To think that seasons sweet as these
 With me are out of blossom

(51連)

春がめぐり来て、いつものように花を咲かせる。その自然の生命の「喜び」¹⁵⁾は「若々しい笑顔」で現われては大人になった詩人をあざ笑う。「一つ一つの光景が記憶を不安にする」ということは、その生命によって誘発された回想行為がかつての「感情」を再び詩人に抱かせることができないからなのであろうか。またはその光景の美しさはかつてのように感動させなくなっているの、「記憶」の作用力が減退しているからであろうか。ともかく美しい季節もまるで「花盛りを過ぎて」いるように思われる。それは自然の「喜び」に感応する詩心を失った状態だともいえる。その結果はこうである。

The fairest summer sinks in shade
 The sweetest blossom dies
 & age finds every beauty fade
 That youth esteemed a prize

(52連)

大人になってみるとあらゆる自然の美が色褪せて見えてくる。クレアは「衰微する大人」(“declining age”)¹⁶⁾を招来する原因は究極的には《時間の流れ》であると判断するものの、そういう破壊力をもつ《時間》をただ単に嘆いたり、非難したりはしない。青春時代に自然の「喜び」を感受できなかったのは人間の「愚かさゆえの軽率な騒ぎ」(“folly's thoughtless fray” 53連)にうつつをぬかし、自然の美を等閑にしたためであるという。

大人になったクレアが痛感したことは、現在はかつての「喜び」を感じる事が不可能であり、最高の「喜び」は過去にしか存在しなかったということである。こうしたことについての確信は次のように表わされる。

The past—there lyes in that one word
 Joys more than wealth can crown
 Nor could a million call them back
 Though muses wrote them down
 The sweetest joys imagined yet
 The beautys that surpast
 All life or fancy ever met
 Are there among the past

(54 連)

「まだ想像されていたこの上なく甘美な喜び」と、実生活あるいは想像の世界において体験されたすべてのものを凌ぐ美は《過去》に属するものとなってしまったという。前にも触れたが、ここで重要なことは、クレアの「喜び」・「美」とは想像力の働きによって感受されるものであったということである。彼の最大の危機意識はこの想像力の衰退であり、喪失であった。

Youth revels at his rising hour
 With more than summer joys
 & rapture holds the fairey flower
 Which reason soon destroys
 O sweet the bilss which fancy feigns
 To hide the eyes of truth
 & beautious still the charm remains
 Of faces loved in youth

(50 連)

無上の「喜び」をもって自然の美を楽しんだ子供時代には、詩人は「想像力」を働かせて美しい花を見ては「忘我の喜び」の状態になったという。この「忘我の喜び」を「理性」が間もなく破壊する。「真実を見る眼」を覆い隠すために「想像力」が思い描く「楽園」あるいは「天上界の喜び」(“the bliss”)を「理性」は消滅させていく。¹⁷⁾「想像力」を働かせて自然の事物を感受し、「忘我の喜び」を味わうということが大人になったクレアにとって特に何ういう意味で重要であったかを次にみていきたい。

(4)

自然は詩人の精神を「一つのとぎれない喜びとして / 楽園を形成する」(“shaping heavens / As one continued joy” 17連) ことに従事させるということが ‘The Primrose Bank’ (1832) の中でうたわれているように、「喜び」はまた想像力が生みだすものの核心でもあると考えられる。この点に関しては、1821-24年に書かれた ‘The Progress of Ryhme’ でこう回顧している。

It [posey] was an early joy to me
 That joy was love and poesy
 And but for thee my idle lay
 Had neer been urged in early day
 The harp imagination strung
 Had neer been dreamed of—but among
 The flowers in summers fields of joy
 Id lain an idle rustic boy
 No hope to think of fear or care
 And even love a stranger there
 But poesy that vision flung
 Around me as I hummed or sung
 I glowered on beauty passing bye

(11. 39-51)

《詩》は恋愛と同じく子供時代のクレアにとって「喜び」であった。《詩》というものがなかったならば、「想像力が調子を整える豎琴」は夢にも考えられなく、希望や心配、また憂いや恋愛さえも知らない田舎の怠惰な少年であっただろうという。だが実際は、歩きながら「想像」が創出する《詩》を口ずさみ、美しい自然の事物が後ろへと過ぎ去っていくのを凝視した。自然の美の中に「詩の女神」の存在を幻視し、その女神に対して崇拜の念を抱いたけれど、その幻視を詩に書き留める勇気はなかった。しかしやがて《詩》の喜びは彼に詩作の決意をさせることになる。

I felt that Id a right to song
 And sung—but in a timid strain
 Of fondness for my native plain
 For every thing I felt a love
 The weeds below the birds above

(11. 80-4)

貧しい農業労働者階級の子弟がその身分故に十分な学校教育をほとんど受けなくて詩作をするという事は当時狂気の沙汰だと考えられていた。クレアは子供ながらにこのことをよく承知していたのだが、自分にも「詩を書く権利」があると感じ、ヘルプストンの自然への愛を詩に記し始めた。子供時代における詩作と自然の関係を次のようにいう。

When I was in the fields alone
 With none to help and none to hear
 To bid me either hope or fear
 The bird and bee its chords would sound
 The air humed melodys around

I caught with eager ear the strain
 And sung the music oer again
 The Fields and woods are still as mine
 Real teachers that are all divine

(11. 134-42)

一人野において、鳥の歌を熱心に聴き、その調べを吸収し、何度も繰り返し歌い学んだ。自然の事物はまだ自分のものようであり、詩作においてはそのすべてが「神聖な真の教師」のように思われた。ただ注意しなければならないのは、自然の事物を「神聖な」と見なしたのは子供時代においてではなく、大人時代においてだということである。回想行為の中で初めて自然の事物は神聖化¹⁸⁾されていったのである。感覚に訴えてくる自然の事物すべてが詩作の対象となっていて、「私の耳目に訴える一つ一つの事物は / 詩の楽園を作った」(“Each object to my ear and eye / Made paradise of poesy” 11. 223-4)というように、それはヘルプストンを「楽園」のようなすばらしい、詩の題材に溢れた世界にしている。

さて「想像力」にとって代る「理性」についてももう少し詳しく調べてみよう。子供時代から大人時代への変化、《時間》の作用力、想像のイメージ等についての次に挙げる二つの散文は、「理性」ということばこそ用いていないけれど、結局は大人になるにつれ出現してきた「理性」の影響力のことを語っている。

(A) The spring of our life—our youth—is the midsummer of our happiness—our pleasures are then real & heartstirring—they are but associations afterwards—where we laughed in childhood at the reality of the enjoyment felt we only smile in manhood at the reflections of those enjoyments ¹⁹⁾

(B) I cannot make out where all these feelings & fancys are gone too—The plot of meadows now dont look bigger then* a large homestead & the ponds that used to seem so large are now no bigger then* puddles & as for fish I scarcely have interest enough to walk round them to see if there is any—yon arches yonder with trees peeping above them & between them & where the traveller is hopping away wearily over them on the narrow road is Lolham Bridges—time makes strange work with early fancys the fancied riches & happiness of early life fades to shadows of less substances even then* the shadows of dreams I sigh for what is lost & cannot help it—yet there is even calm spots in the stormiest ocean & I can even now meet happiness in sorrow the rural pictures or objects in these flats & meadows warms ones loneliness such as a rustic driving his little lot of cows or sheep down the plashy droves & plucking a handfull of awes from the half naked hedges to eat as he goes on ²⁰⁾ *than

1825-37年に書かれた(A)の引用では、実際に味わった楽しさで笑った子供時代と、その楽しさを回顧して微笑むだけの大人時代との落差を簡明に記述している。また1841-48年に書かれた(B)の引用では、「牧草地在今では農場ほどの大きさにしか見えない」程、想像の眼で知覚されていた事物は理性の眼によって現実的感覚で知覚されるようになったこと、《時間》が子供時代の想像のイメージに「不思議な作用」をしたことを確認している。また《時間》と《詩》については1832年までには次のようなことがクレアの信念となっていた。

There is nothing but poetry about the existance of childhood real simple soul
moving poetry the laughter and joy of poetry and not its philosophy and there
is nothing of poetry about manhood but the reflection and the remembrance
of what has been nothing more

(*Selected Poems and Prose of John Clare*, p. 18)

子供時代についての《詩》だけがあって、それは哲学をうたったものではなく、笑いや喜びをうたったものである。大人時代については過去の内省と思い出があるばかりで《詩》はないという。このように《時間の流れ》は《詩》の喪失の原因でもあると断定している。

さて《詩》の喪失は「理性」の現出と、また「想像力」及び「感情」の衰退とも関連しているが、この点については *The Shepherd's Calendar* に注目すべき一節がある。

Where are they gone the joys and fears
The links the life of other years
I thought they bound around my heart
So close that we could never part
Till reason like a winters day
Nipt childhoods visions all away
Nor left behind one withering flower
To cherish in a lonely hour
Memory may yet the themes repeat
But childhoods heart doth cease to beat
At storys reasons sterner lore
Turneth like gossips from her door

(p. 19)

子供時代は夏に、大人時代は冬に喩えられる。「理性」は冬の日のように、「喜びと恐怖」を失った詩人から「子供時代のヴィジョンをすべて枯れさせ」、「孤独のときいとおしむ凋んでいく一輪の花さえ残さなかった」という。「凋んでいく一輪の花」とは「困り込み」によって失われた自然の象徴ではなく、詩的想像・幻想を象徴するものである。詩的想像力が働かなくなった時でも、「記憶」は子供時代をテーマとする回想を繰り返すのであるが、「理性が修める厳格な知識」が拒否する「おとぎ話」を聞いても今はもう感動することはない。感動する心を失ったことは「詩的想像力」(“poesy”)の消滅を示す。子供が大人になるとき、《経験》をとおして「理性」は「厳

格な知識」を身につけていく。クレアの場合、子供が世の中を経験していくにつれ、「驚異の念」(“wonderment”)を失っていくことは「人間の墮落」(“the Fall”)の再演であるとG. Crossanは指摘している。²¹⁾ クレア自身も、

ah what a paradise begins with the ignorance of life and what a wilderness the
knowledge of the world discloses surely the garden of eden was nothing more
then* our first parents entrance upon life and the loss of it their knowledge of
the world

*than

といい、²²⁾ 《経験》によって世の中についての知識が身につくことは「楽園」からの「荒野」への転落であると考えていた。このようにして「想像力」が「理性」によって侵蝕されていくことを次のようにも簡潔に描いている。

That warmth of fancys wildest hours
Which made things kin to life
That heard a voice in trees and flowers
Has swoond in reasons strife

(p. 41)

子供時代というのは本質的には、「理性」によって消滅させられていく「詩の時代」であったことがこう強調される。

Ah where is page of poesy
So sweet as theirs was wont to be
The magic wonders that deciev'd
When fictions were as truths believ'd
The fairey feats that once prevail'd
Told to delight and never fail'd
Where are they now their fears and sighs
And tears from founts of happy eyes
Breathless suspense and all their crew
To what wild dwelling have they flew
I read in books but find them not
For poesy hath its youth forgot
I hear them told to childern still
But fear ne'er numbs my spirits chill
I still see faces pale wi dread
While mine coud laugh at what is said
See tears imagind woes supply

While mine wi real cares are dry

(pp. 18-9)

「詩的想像力はその活力を忘れてしまった」即ち衰えてしまったので、「感情」が喚起されなくなったという。この「詩的想像力」と「感情」の喪失がクレアにとって最大の痛手であった。M. Storey は 'Decay' 論の中で《時間》と《詩》及び《自然》との関係について次のように説明している。

. . . The sun image acquire new relevance as it is connected with all the deceit of love: the irony is that time has undeceived Clare, and forced an awareness of reality onto him. Nature has been normalised, reduced to what she really is. Poetry has gone with the dream, for it depended on the dream, and the past, just as the past depended upon her . . . ²³⁾

こういう《時間》の破壊力によって《自然》が想像されない自然へと、現実の自然へと変えられていったという認識は、《時間》に破壊されることのない、否《時間》に保護される自然の永遠性をテーマとする詩、例えば 'The Eternity of Nature' を書いている。その冒頭はこうである。

Leaves from eternity are simple things
To the worlds gaze where to a spirit clings
Sublime and lasting—trampled underfoot
The daisy lives and strikes its little root
Into the lap of time——. . .

(11. 1-5)

無変化・無時間の《永遠》の世界、即ち天上界において神が創造した自然の事物・生命は現世では「時間のふところ」で生息する。それらは「時間の仲間として」(“as times partners”)、「呪われた大地で」(“on the blighted earth”)「死のふところに抱かれて」(“on the lap of death”) 生きている。ヒナギクは「神の息吹の下エデンにおけるかつてのごとく」(“as once in eden under heavens breath”) 永遠に咲き、同様にキバナクリンソウも変わることなく「額にあの五つの深紅の斑点をつけて」咲く。つまりクレアにとって自然の事物・生命の永遠性とは、人間の移ろい易さの認識ゆえに自然の事物を不変なるものとして理想視していることの所産であり、これは人間も《自然》と同じく不変であってほしいという願望の現われであると解釈できよう。さらに自然の事物・生命の不変性はこう表現される。

And the small bumble bee shall hum as long
As nightingales for time protects the song
And nature is their soul to whom all clings
Of fair or beautiful in lasting things

(11. 39-42)

マルハナバチもナイチンゲールも《時間》によって保護されていて、《自然》がそれらの靈魂であり、永続する美しいものにはすべてこの靈魂が宿っているとす。そして「自然の方法はすべて神秘 だが無限の若さが / それらすべてのなかに真理のように変わることなく生きている」(“Her [nature’s] ways are mysterys all yet endless youth / Lives in them all unchangeable as truth” 11. 75-6)と思われた。自然の不変性はこう敷衍される。

And in the cowslap peeps this very day
 Five spots appear which time ne'er wears away
 Nor once mistakes the counting—look within
 Each peep and five nor more nor less is seen

(11. 79-82)

「五つの斑点」は、これを《時間》が保護こそすれ決して侵蝕したり、摩滅させるものではなく、永遠なるものである。《自然》と《時間》に保護されてあらゆる地上の生命が永遠に生存し続けることはその創造者の意志である。この地上の「秩序」(“order”)は、この創造者が永遠に「知恵・権力・能力の鍵」(“the key of wisdom power and might”)を保持している超越した神であることの今でもなお証になっていると述べてこの詩を終えている。

このように自然の事物・生命を保護する《時間》は、「傲慢」・「権勢」・「恋愛」²⁴⁾・「富」等の人間的事柄、人工物をすべて破壊してしまうことが、‘The Vanitys of Life’(1825)でうたわれている。²⁵⁾ また ‘On Seeing a Skull on Cowper Green’(1824-32)では人間の理性、高慢、名声、自然界に対する支配等人間的なものの一切が究極的には《死》に至らしめる《時間》の前では虚しい存在であると瞑想する。

I mused on reasoning mans exalted sway
 Oer the brute world—pride made my feelings brave
 Creations lord to me he seemed that day
 I felt as if all nature was his slave
 But times glass soon did mock my visioned might
 I saw & shrunk an insect at the sight

(1連)

クレアは「理性のない世界に対する理性をもった人間の意気揚々たる支配」を想っては、人間であることの誇りで雄々しい気持ちになった。人間自身が造物主のように思われ、《自然》がすべて人間の奴隷であるかの如く感じられたからである。だが幻想された私の力を「砂時計」即ち《時間の流れ》が間もなく嘲笑した。「理性」については別の詩で、「摂理が意図することを理性が定めるのであるから / 存在するものは確かに正しいものであるに違いない」(“Since reason rules what providence designs / What ever is must certainly be just” ‘Elegy Hastily Composed &

Written With A Pencil On the Spot In the Ruins of Pickworth Rutland' 7 連, 以下 'Elegy' と略す) というように、「理性」は全能なる造物主に属するものと考えられている。このような「理性」が人間に属するものとなり、造物主よろしく「理性のない世界」を支配するようになったというクレアの見方は、『囲い込み』が彼に与えた強烈な印象と深い関連があるのではないか。《時間》は「理性ある人間」の傲慢を戒めるものとしてこうも描かれる。

Time keeps the wreck to mock at earthly fames
To show vain glory in its golden birth
Of what poor value it is held by death

('On Seeing A Skull on Cowper Green' 3 連)

《時間》のもつ最大の効力は「死」である。現世の名声をあざ笑い、貴い身分に生まれたことの栄誉も虚しいものであることを示すために《時間》は髑髏を保存する。(自然の永遠性を象徴することばと見做される “keep” が、ここでは人間的なもののはかなさを強調する《時間》の作用を表わす語句の中で用いられている) その栄誉がいかにつまらないものであるかが「死」によって証明される。したがって詩人は「現世が与えてくれるものを誰が誇りに思うであろうか」(“Who would be proud of what this world bestows” ‘Elegy’ 9 連) といって、人間的な事柄、人工的なもののはかなさを観取した詩人は永遠なるものを志向していく²⁶⁾ この志向が子供時代を天上の無時間の世界においてではなく、地上の時間の世界において、永遠なるEdenとして理想化することになる。この理想化は、「記憶」の作用による《時間の流れ》の克服であり、大人であることの現実を忘れる回想行為によって達成されるのである。それゆえにこういう。

O I could tell for aye & never tire
The simple trifles infancy supplys

O I do love the simple theme that tries
To lead us back to happiness agen
& make our cares awhile forget that we are men

('The joys of childhood are . . . , 7 連)

回想行為を可能にする「記憶」も確実に《時間》によって衰退させられ、「忘却」へと変化していく。この冷徹な事実に対する恐怖と、《時間の流れ》に対する鋭い感受性は自然のイメージを織り込んだ、人生についての非常に内省的で示唆に富む次のような詩行を書かせている。

Amidst the happiest joy a shade of grief
Will come—to mark in summers prime a leaf
Tinged with the autumns visible decay
As pining to forgetfulness away
Aye blank forgetfulness that coldest lot

To be—and to have been—and then be not

('Decay' 1932)

《時間の流れ》に対する鋭い感受性は、無上の《喜び》の真ただ中にも一抹の悲しみを意識させる。その悲しみのしるしはちょうど真夏においてさえ既に見られる、《忘却》へと衰微していく色づいた木の葉のようなものであるという。

さて以上、1819年から32年に至るまでの詩を読みながら、主に子供時代と子供から大人への変化についてのクレアの意識と感情を概観してきたわけだが、「失われた時の回復」というのがこの時期のクレアの詩における増大していくテーマであったといえよう。そしてこのテーマの延長線上に三つの失意の詩が創作されたのである。1830年代の詩の主要な関心は《時間》となっていく、これらの失意の詩においては「記憶」の衰退にもかかわらず、クレアの詩的想像力は、過去を「エデンの園」として回想すると同時に再創造することによって、ますます自己のアイデンティティを追求することに作用していくこととなる。

注

- 1) Cf. Tim Chilcott, 'A Real World and Doubting Mind': A Critical Study of The Poetry of John Clare, (Hull U. P., 1985), p. 127.
- 2) These joys all known in happy infancy
 & all I ever knew where* spent on thee** *were **Helpston (11. 67-8)
 なおクレアの詩及び一部の散文の引用は下記のテキストに拠った。
 E. Robinson, D. Powell and M. Grainger eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822* (Oxford U. P., 1989)
 E. Robinson and D. Powell eds., 'The Oxford Authors': *John Clare* (Oxford U. P., 1984)
 A. Tibble and R. K. R. Thornton eds., *The Midsummer Cushion* (Mid Northumberland Arts Group in association with Carcanet Press, 1978)
 J. W. Tibble ed., *The Poems of John Clare* (J. M. Dent & Sons, 1935)
 E. Robinson and G. Summerfield eds., *The Shepherd's Calendar* (Oxford U. P., 1964)
 E. Robinson and G. Summerfield eds., *Selected Poems and Prose of John Clare* (Oxford U. P., 1967)
- 3) 詩人としてのクレアにとって子供時代がもつ意味の重大さについては、E. Robinson and R. Fitter eds., *John Clare's Birds* (Oxford U. P., 1982)の Introduction: 'Clare as Poet' の中の次の個所が想起される。
 Almost everything Clare ever experienced stems from his childhood at Helpston. We hear little or nothing about what he may have seen or heard in Epping Forest, at Northampton, or even at Northborough. It is the observations of his childhood years at Helpston that are so sharply imprinted in his mind and pour out in his poems and his prose. (p. xx)
- 4) Chilcott, p. 248.
- 5) 自然の事物が帯びる《エデンの園》の構成要素としての性格は、1809-13年作の 'Helpstone' において既に読みとれる。

Sweet cooling shades & soft refreshing springs

& tho fates pleas'd to lay their beauties bye
 In a dark corner of obscurity
 As fair & sweet they blo[o]m'd thy plains among
 As blooms those Edens by the poets sung (11. 118-22)

6) ジョルジュ・プーレ, 『人間的時間の研究』井上究一郎・他訳 (筑摩書房, 1976), p. 30.

7) Chilcott, p. 248.

8) Cf. W. J. Keith, *The Poetry of Nature* (Toronto U. P., 1980), p. 46.

9) ピーター・カヴニー, 『子どものイメージ』江河 徹監訳 (紀伊国屋書店, 1979), p. 84.

10) プーレ, p. 408.

11) O 'sweet of sweets' from infancy that flow
 When can we witness bliss so sweet as then
 Might I but have my choice of joy below
 I'd only ask to be a boy agen ('Childish Recollections' 17連)

12) クレア自身の変化については 'On Visiting A Favourite Place'(1832) に次のような個所がある。

When last I roamed these bleachy swells
 Of hills & hollows all was here
 Oer which the heart in rapture dwells
 Peace love & quiet everywhere
 & nought is changed since last I came
 Then can I help but be the same (2連)

13) Thy blooming pleasures, smiling, gay,
 The seasons still renew;
 But mine were doom'd a stinted stay,
 Ah, they were short and few! (3連)

Still coming years thy flowers shall bring,
 And bid them bloom anew.
 Man's Life, that bears no kin to them,
 Past pleasures well may mourn:
 No bud clings to its withering stem —
 No hope for Spring's return. (5連)

14) J. M. Toddはその著 *In Adam's Garden: A Study of John Clare's Pre-Asylum Poetry* (Florida U. P., 1973) の中で "Clare's concept of eternity is always earthly and cyclical, not metaphysical and spiritual" (p. 136) と判断している。

15) 自然の生命の「喜び」については 'Emmonsales Heath' に
 Joy nursed me in her happy moods
 And all lifes little crowd
 That haunt the waters fields and woods
 Would sing their joys aloud (11. 73-6)

とあるが、この「喜び」とクレアの想像及び詩作の「喜び」とが共鳴、融和する。

16) Cf. 'Helpston Green'

Farwell thou favorite spot farwell
 Since every efforts vain
 All I can do is still to tell
 Of thy delightful plain
 But that pro[v]es short—increasing years
 That did my youth presage
 Will now as each new day appears
 Bring on declining age (7連)

17) 1832年に公表される予定であった詩 'Pleasures of Spring' には、「想像力」と「理性」の関係についての次のような興味深い個所が見られる。

. . . in the raptures of his warm delight
 Mans reason keeps its wisdom out of sight
 Leaving the sweets of fancy running wild
 & half remains as he hath been a child (11. 133-6)

18) 自然の事物の神聖化については次のような表現が注目に値する。イタリックスは筆者。

So in these spots that memory makes *divine*
 I dream of happiness and call it mine. ('Bushy Close')

His thoughts rush out with joys unfelt before
 & maddening raptures make his soul run oer
 With its *divine* conceptions till they rise
 Forgetting earth & mix with paradise ('Pleasures of Spring' 11. 361-4)

クレアは大人時代になってから過去の、失われた自然の世界を神聖化し始めた。というのは、子供時代には実在する自然の事物にたいする驚異の念・喜び・自然科学的関心・想像力・感受性といったものが横溢し、彼の内面生活は充実していたからである。

19) J.W. and Anne Tibble eds., *The Prose of John Clare* (Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 225.

20) Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Oxford U. P., 1983), p. 334.

21) Greg Crossan, *A Relish For Eternity: The Process of Divinization in the Poetry of John Clare* (Universität Salzburg, 1976), p. 95.

22) Eric Robinson ed., *John Clare's Autobiographical Writings* (Oxford U. P., 1983), p. 31.

23) Mark Storey, *The Poetry of John Clare: A Critical Introduction* (Macmillan, 1974), p. 141.

24) 「恋愛」の変化はMary Joyceとの恋愛関係の破綻を指していると思われる。彼女へのクレア自身の愛情も《時間の流れ》とともに変化している。このことは、彼が後にメアリーと自然を同一視したこと、記憶における彼女のイメージの薄弱化や《忘却》といった様相を想い浮かべれば容易に理解される。

25) Pride power love wealth & all
 Times touchstone shall destroy
 & like base coin prove all
 Vain substitutes for joy (2連)

26) 永遠なるものへの志向、趣好に関しては、クレア自身次のようにいう。

& all the pictures of lifes early day

Like evenings striding shadows haste away

Yet theres a glimmering of pleasure springs

From such reflections of earths vanity

That pines & sickens oer lifes mortal things

& leaves a relish for eternity ('Nothingness of Life' 1821-24)

Clare and Childhood

Ren-ichi SUZUKI

In 'Childish Recollections' (1819-20) Clare regrets that "the raptures of delights" have "gone bye" even though he sees the scenes of his childhood. The natural objects remain as they were, but they cannot evoke "feelings" in him. This makes him keenly aware of the passage of time. Recollection of the past in order to forget "sad manhood" becomes the main theme of this poem. In 'Childhood' (1832), Clare characterizes childhood as "happy dream," "joyous play," "life without a sigh," and "beauty thoughts can neer pourtray." It is his "fancy" that enables him to enjoy these characteristics. Only because his child's eye of fancy saw the natural objects, could his "feelings" or emotions be evoked. As he grows up, however, fancy gives way to reason and "each sight leaves memory ill at ease." Reason destroys "the raptures" and "the bliss" that were felt through the work of his fancy. 'The Progress of Ryhme' (1821-24) shows that it was the joy of the natural objects which led Clare to start writing poetry. This joy derived from natural beauty made him feel that he had "a right to song" and say, "Each object to my ear and eye / Made paradise of poesy." With respect to the making of poetry the natural objects were, to Clare, "real teachers that are all divine." In *The Shepherd's Calendar* (1827) Clare emphasizes that his childhood is a "page of poesy." He has lost "wonderment," "feelings," "fancy," and therefore "poesy" owing to "reasons sterner lore" acquired by experience. Although Clare becomes conscious that his memory decays to oblivion and that the images of the past are wearing away, he tries to find his identity, at once recollecting and recreating the past as Eden.